

英語表記にみる子ども学の多層性

白梅学園大学 子ども学部 子ども学科

准教授 首藤 美香子

二〇〇九年六月の本誌創刊号では、『地域と子ども学』の英語表記が“Community and Child Studies”であるのに対し、二〇一〇年二月発行の第二号では“Community and Child Science”と子ども学の定義がChild StudiesからChild Scienceに変わっている。そのついでの変更の意図が誌面のどこにも説明されていないことに、首を傾げた読者もいるのではなからうか。第三号の執筆を依頼され、改めて本誌を手にとった筆者もその一人だが、十九世紀末に登場した「子ども」を対象とする学問研究に対する「名付け」をめぐるこうした〈揺らぎ〉は、この領域がまだ学問の系譜的な関係のなかにしっかりと繋ぎとめられてお

らず、言葉によって支えられる「存在」の秩序のなかにも確かな場を与えられていない苦い現実を象徴するようでもあり、興味深く感じた。

従来、「児童学」あるいは「児童研究」の英語表記としては、Child Study (チャイルドスタディ) をあげるのが一般的であった。このほか「児童学」の訳語としては、アメリカの児童心理学・教育心理学の創始者とされるスタンレー・ホールの門下生、オスカー・クリスマンが構想し一八九六年提出の学位論文のなかで体系づけた Paidology (パイドロギー) がある。Paidology とは、ギリシア語の Paidos (児童) と Logos (学) を結びつけたクリスマンの

造語であるが、当時より Child Study と Paedology は同列に並べられることが多く、結果として Paedology という新語は米国でも日本でも定着しなかったとされる¹⁾。

Child Science (チャイルドサイエンス) は、小児科医の立場から子ども学の構築の必要性を提唱してきた小林登によつて近年普及をみてきている。小林は、一九八五年に編纂した『新しい子ども学』のなかの〈子ども学の現状と課題〉で、「今、私たち小児科医に求められているのは、子どもたちの体ばかりでなく、心を科学的、さらに生物科学的な基盤で、新しい包括的な立場でとらえなおし、臨床の現場に応用することなのです。それには従来の発達心理学ばかりでなく、行動科学・文化人類学・社会人類学などの理念も必要と思えるのです。換言するならば、ソフトな小児科学を、科学、とくに生物学・医学のハードな立場でとらえることが必要なのです。現在の関連諸科学は進歩し、とくに情報科学・システム科学などの理念はそうすることを可能にしています。ですから、子どもの心と体、子どもの発育に関心をもつ人々は、一堂に会して学際的な研究チームを作らなければならないと思います。」と、生物学、医学、情報科学、システム科学を基盤とする科学的な子ども学のデザイン化を推奨している。

小林はさらに、二〇〇八年『子ども学のまなび』で、「子ども学を Child Science と英語表記にする理由を、「子ども学」の基盤には、まず生物学を中心とする自然科学

的な体系があります。そのうえで「子ども学」は、医学、保健学の分野、すなわち小児科学ばかりでなく、心理学、教育学、育児学、保育学なども大きく取り込まなければなりません。さらにはそれらを超えて、子どもに関わる社会学、行動学、行動科学、文化人類学など人文科学を有機的に包括し、統合する必要があります。したがつて「子ども学」は文理融合科学なのです。そういう学問体系を打ち立てるためには新しい科学的立場が必要です。私はそれを、①人間科学 (human science)、②子ども生態学 (child ecology)、③システム・情報論、④脳科学 (brain science) の四つに求めたいと思います。」と、科学としての子どもの体系化を図ろうとしている。小林がイメージする Child Science には、人間のすべてを科学という基盤から捉えようとする発想があるといえる。

ところで、たとえば生理学、医学、心理学、教育学、認知科学といった子どもを対象とする二十世紀の科学研究の発展を基礎に、子ども研究の理論モデルを描こうとする立場とは別に、人文・社会科学を中心とした学際的な子ども学研究 Childhood Studies がある。

Childhood Studies が焦点をあてるのは、いわゆる依存性・学習・成長・発達などで特徴づけられるような自然の生物学的な発展段階にある子ども期の実態あるいは経験、つまり子どもの存在 Child そのものではない。むしろ、子どもという存在を規定する要因、すなわち成人と子ども

もは「」で境界線が引かれるのか、Childhood という子ども期の指標となる具体的な枠組みと範囲、子ども期の社会的・文化的・心理的役割と目的、子ども期についての観念 (idea) や大人の心的態度であり、他のあらゆる概念と同じく子ども期を近代に創案されたひとつの概念 (concept) と捉え、ある特定の空間と時間のなかで社会的文化的に構成されたものと見なす。その意味で Childhood Studies は、社会構成主義派が優勢な子ども学であるといえ、子どもを教育と保護の対象とみなす近代の子ども観に強い疑念を示し、歴史学、社会学、人類学、民族学、文化論などの研究法と理論を駆使しながら、改めて「子どもとは何者か」「子ども期は何によって構成されるのか」、子どもの存在の要件について複数の答えを導き出そうとしている⁴⁾。

奇しくも二〇一〇年は、Ph.アリエスの「子ども」の誕生⁵⁾が発表されて五十年の節目の年に当たる。アリエスの研究によつて、ヨーロッパ中世と近世の子どもは、七歳になるまで大人のミニチュアだと考えられ、子どもたちを成人に向けて準備させること (すなわち教育) や、子どもたちに対して感情的に投資をすること (要するに愛情深く接し、時間をかけ、注意を払う) こと、子どもたちに割り当てられる活動と大人のそれとに区別がなかったことが示されたが、その是非をめぐるは一九九〇年代まで激しい論争が巻き起こされてきた。しかし、現在までアリエスの仮説が

決定的に覆られることはなく、Childhood Studies はアリエスを批判的に継承しつつ新しい発展段階を迎えている。

筆者はかつて、非ヨーロッパ世界の Childhood Studies の第一人者・熊秉真 (Hsiung Ping-Chen) の研究成果について紹介した⁶⁾。熊秉真は、中国の明・清時代 (the late Imperial period of Chinese History, 三六八年—一九二一年) において、現代の子どもが発達区分に倣うならば、誕生時から思春期にいたるまでの子どもを対象とした、授乳・排泄といった日常のケア、疾病予防と病氣治療、乳母や家庭教師の選択、就学前の家庭教育や家塾の教育理念とプログラム・教材、飲食と遊びや快楽に対する禁制と実態、玩具・出版文化などの子ども向けの物質文化の発展、そして子どもが所属した家族の複雑な人間関係 (特に異性間の親子関係) に注目し、儒教書、医学書、臨床記録、伝記、自伝、年譜、書信、美術、文学作品などを手がかりに、約五百年間で子どもへの関心や愛着、期待が高まり大人と子どもの心理的距離が縮まると同時に、子どもの特性や子ども固有の世界の存在を容認し配慮する新しい「大人—子ども関係」が中国で発現していく複雑で起伏に富んだ道程を描写しようとして試みている。

ここで留意したいのは、熊秉真の研究が、今日の子どもの学研究のあり方、すなわち科学主義を標榜する余りその前提とする「科学的」方法論の妥当性を問わず、近代に普遍的な子ども観つまり教育と保護の対象としての子ども

も観を自明として疑うことを知らないChild Scienceの学的脆弱さや、ヨーロッパやアメリカで著しく進展しているChildhood Studiesの輸入紹介に終始するに留まり日本の史資料をもとにした独自の研究の蓄積が立ち遅れている社会構成主義派のChildhood Studiesの制度的脆弱さに対して、ある示唆を与えてくれる点である。

なかでも注目したいのは、熊秉真が、大人と子どもの関係は固定した不変のものではなく、相互に影響を与えあい変化する動的なもの、すなわち「互動」であったとの見解に立ち、過去の社会・文化のなかでの子どもの能動性、主体性を積極的に読み取ろうとする姿勢である。例えば、大人から要求された期待や願望を子ども自身はどう理解し行動したか、階層主義の厳重な規範文化の圧力に屈したのかどうか、どういう場面で子どもは自由や解放を得たか、大人の言動、特にその矛盾や不道徳、墮落した生活を子どもはどう捉えたか、死が身近にあった社会で病氣や孤独とどう戦い運命と向き合おうとしたか、具体的に残された子どもの言葉から丁寧な掬おうとする。

「本当の問題は外の作用に対する影響であり、成人中心の社会状況の下で現れている子どもの自主的な声や動作、大小の子どもたちが擁する自主的な感情、内に含む動作を掘り下げていくこと¹⁾」だとする熊秉真の主張からは、子どもを対象に科学的なデータを収集・分析しようとする場合、精確さや厳密さを追究すると子どもの丸ごとの

生や経験をバラバラに分断してしまふこと、また大人と子どもに所与とされる不均衡な力関係に対して無配慮な場合、大人を主体とみなし、子どもは外的な作用を二方的に受動する存在であるとの前提に立つてしまふ傾向が強いことに対する、強烈な批判がこめられている。

子ども自身が子どもであるということはどう生きたのかという子どもの能動性や主体性、子どもは大人に対してどのように影響を及ぼそうとしたかという子どもからのベクトル、子どもと大人の相互的でダイナミックな関係性を研究の視座に加えることは、Child Study、Child Science、Childhood Studiesのいずれの子ども学においても、まだ課題であるといえないだろうか。

子ども学を英語で名づける（揺らぎ）の背景には、未だ言葉を持たない「アンファンス」を生きる子どもの声を拾うことの根本的な難しさ、あるいは輪郭が曖昧で不確定で不安定な「子どもらしさ」の虚構を埒外に排除しなければ、科学として成立しないアカデミズムというものの絶望的な狭さといったものが、見え隠れしているのかもしれない。

1 斉藤薫（1988）「バイドロジーオスカー・クリスマンの児童学」

お茶の水女子大学家政学部児童学科 卒業論文 D.P.31-39

2 小林登（1985）「子ども学のデザイン」「新しい子ども学」第

一卷 海鳴社 P.39

- 3 小林登 (2008) 『チャイルドサイエンス 子ども学のまなび』
明石書店 p.34
- 4 Paula S.Fass eds. (2004) Encyclopedia of Children and
Childhood in History and Society New York, vol.2 "History of
Childhood" pp.422~430, vol.3 "Theories of childhood" pp.818
~ 826 なお、Childhood Studies については、青山学院大学
教育学部教授 北本正章氏より多くの示唆をいただいた。北
本正章 (2009) 「子ども観の社会史研究における非連続と
連続の問題：欧米におけるアリエス・パラダイム以降の諸学
説にみる新しい子ども学の展開と構成」青山学院大学教育学
会紀要『教育研究』53参照
- 5 首藤美香子 (2003) 「子ども」の視座の奪還—熊秉真『童
年憶往—中国孩子的歴史』考—『比較家族史研究』第18号
pp.55 ~ 69
- 6 熊秉真 (Hsiung Ping-Chen (2000) 『童年憶往—中国孩子
の歴史』麦田出版) Hsiung Ping-Chen (2005) A Tender
Voyage: Children And Childhood in Late Imperial China,
Stanford Univ. Press
- 7 熊秉真 (2000) p.23

表紙によせて

『地域と子ども学』創刊号と第2号は、本学園の委託事業である東村山市にある子育て支援センターの「ころころの森」を掲載しました。

今回は、地域交流研究センターを特集するにあたり、本学園の地域を象徴している玉川上水の風景をとりあげました。

春夏秋冬思いがけない美しさの風物誌に育まれながら本学園と地域との交流を発展させていきたいと願っています。

表紙の英語表記の訂正とお詫び

本誌創刊号の英語表記が Community and Child Studies であるのに、第2号では Community and Child Science となっておりました。Community and Child Studies が正式英語表記となります。ここに訂正とお詫びを申し上げます。